

### 3. 2. 4 大川小学校付近における地震発生後の対応

#### (4) 校内における対応 (案)

##### ①地震発生と一次避難

地震が発生した14時46分頃、大川小学校では、全学年がその日の授業を終えていた<sup>1)</sup>。得られた証言等によると、1年生と5年生は教室で「帰りの会」の終わる直前、4年生は教室で歌の練習をしていた。また2年生、6年生は帰りの会が終わってすでに解散していた。地震発生前に、子どもを迎えに来ていた保護者が校内ですれ違った6年生児童から元気に「さようなら」と挨拶されたという証言や、下校途中の一部児童の姿を校外で見かけたという証言がある。3年生については、すでに帰り支度を済ませていたと見られる状況がある一方で、「帰りの会の終わる頃だった」という証言もある。

校内にいた教職員のうち、担任クラスを持たない教職員 A は更衣室、教職員 B と教職員 C は職員室にいた。またクラス担任のうち教職員 D は、児童を迎えに来た保護者と話すために渡り廊下を体育館側へ移動している最中だったが、他のクラス担任はほとんどが受け持ちの教室にいた。教職員 E は当日の午後に休暇をとって不在にしており、また、教職員 F は用務のため校外にいた。さらに、地震発生時には数名の保護者が、子どもの迎えなどのために校内あるいは学校付近にいた。また下校する児童を待つスクールバスが、尾崎・長方面へ向かう第1便(14時58分出発予定)のため、県道238号線を東に向けて止まっていた。

児童は、地震の発生と同時に机の下に隠れた(一次避難)。1～2年生のいる低学年棟の教室からは「怖い～」「お母さ～ん」などの泣き声が聞こえたが、3年生以上の教室は比較的静かだったという証言がある。しかし、高学年の教室でも、混乱して無意味な行動をとったり泣き出したりする児童もいた。一方で、高学年では、2日前の地震で同様の経験をしたことが教職員に指示される前の円滑な避難につながったとの証言もある。

クラス担任たちは、受け持ちの児童に声を掛け、揺れが収まるまで一次避難を続けるように指示をしたり、泣き出した児童を落ち着かせようとした。たとえば、教室をやや離れていた教職員 D は、すぐに戻って自分のクラスと隣のクラスに「机の下へ」などと一次避難を指示した後、訪ねてきていた保護者にも身を守るように伝え、教職員 G は、揺れの最中も教室の入口付近に立ち、落ち着いて子どもたちのようすを見守っていたという証言や、教職員 H が泣きだした児童をなだめていた、などという証言がある。児童同士も、互いに声を掛け合い、揺れが収まるまで避難を続けた。

教職員 A は急いで更衣室から職員室に移動して上着をはおり、私物の携帯電話を上着のポケットに入れた。その後、教職員 B と相談の上で、揺れが続く中、校舎内を走り回って一次

<sup>1)</sup> 石巻市教育委員会提供資料によると、震災当日の「帰りの会」終了予定時刻は全学年14時35分だったとされている。一方、この週は卒業式の予行演習などが入っていたため授業時間短縮の措置がとられており、通常より早めに終了していたのではないかとの証言もある。

避難を呼び掛けた（停電で校内放送は使えなかった）。この際、まず低学年棟の1～2年生の教室に声を掛け、続いて2階に上って3年生以上の教室に声を掛けている。

## ②校庭への二次避難

3分ほど続いた揺れが収まったのち、教職員 A は、さらに校庭への二次避難を呼び掛けたとされる<sup>2)</sup>。児童たちは、クラス担任による誘導の下、1～2年生は教室の窓から直接、3年生は県道側の階段を降りて昇降口から、4～6年は体育館側の階段を降りて体育館側出口から、それぞれ校庭へ避難をした。

校庭への避難の際、すでに帰りの準備が終わっていた児童を除き、ほとんどの児童が室内での服装のまま、避難訓練と同様に、ランドセル等の持ち物は持たずに校庭へ避難した。また、ヘルメットをかぶったり手に持ったりして避難した児童もいた。

校庭では各学年2列に並んだとされる。各学年がどこに並んだかについては、学年順で体育館側が高学年だった、学年順だったが逆に体育館側が低学年だった、規則性がなかった、校庭へ避難してきた順番に道路側から並んだなどというさまざまな証言がある一方で、途中で並び替えたという証言もあった。

児童らが校庭に出てそれほど時間がたたない頃に、校庭の道路側に設置された防災行政無線子局から「大津波警報発令」の広報が流れた（市の記録によると、これは14時52分とされている）。複数の児童がこれを聞いたと証言している。

## ③二次避難後の校舎内の確認等

一方、児童らに二次避難を呼び掛けた教職員 A は、その後、校舎内すべての教室・トイレなどを回って、残っている児童がいないことを確認した。校舎内では、ガラスが割れるなどの大きな被害はなかったものの、廊下では防火扉が閉まっていた。職員室では棚の上のものが散乱し、鍵を一括管理していたキーボックスが落下して鍵が散乱するなどの状態だった。

教職員 A は、15時少し前頃には校舎内の確認を終えて校庭に出て、教職員 B らに残留児童がいなかったことを報告した。その時点では、校庭における（クラス担任らによって行われた）人員確認は終わっていたとされる。

その頃、校庭には、体育館への渡り通路の下や自転車小屋の脇などを通して、校庭に地域住民が避難してきていた。その人数は、徐々に増えたとする証言もあるが、それでも多くても数名から十数名程度とされる。校庭でこれら地域住民がいた場所としては、自転車小屋付近のタイヤ遊具付近や、校庭の中でも釜谷交流会館に近い側という証言がほとんどである。

教職員 A は、避難してきた住民の様子を見て体育館への受け入れを考え、体育館の状況を確認しに行った。体育館1階の入口はすべて施錠されており、その鍵は地震により落下・散乱したキーボックスに入っていて特定が困難だったため、外から解錠するのではなく校舎側

<sup>2)</sup> この際に教職員 A が「山へ」と呼び掛けていたとする児童の証言があるとの情報が得られたが、当委員会として直接これを確認することはできなかった。

から2階の渡り廊下を通過して体育館に入った。渡り廊下は継ぎ目に段差が生じており、また、渡り廊下から体育館に入るドアは変形したためなかなか開かなかったため体当たりをして開けた。体育館の中は天井の部材などが落下しており、また校舎側1階入口扉を内側から開けて外に出ると、付近に設置されていた暖房用灯油タンクの継ぎ目から灯油が漏れていた。また、余震のたびに2階の窓ガラスが大きく揺れているなど、体育館の窓ガラスは落下の危険があると教職員Aは考えた。

このため教職員Aは、体育館内へ入ろうとする住民数名に対し、危険であることを伝え、体育館から離れるように言った。また、校庭に戻り、教職員Bらに対して、体育館は使用できないことを伝えた。

#### ④二次避難後、15時15分頃までの校庭の状況

校庭に出た教職員らは、それぞれが担当するクラスの付近にいて、児童の面倒をみるなどしていた。余震による激しい揺れで、悲鳴をあげる児童、泣き出す児童もいた。低学年を中心に泣いている児童が何人もいたため、教職員はこれを落ち着かせようと「大丈夫だよ」「怖がらなくていいから」などと声を掛けた。中には嘔吐する児童もいて、教職員とともに校庭を離れて中庭の方へ行ったとの証言もある。

児童のそばにいただけでなく、複数の教職員が指揮台（朝礼台）周辺に集まって話し合っていたとする証言も多数ある。ほぼ全員の教職員が集まっていたという証言もある一方で、数人が指揮台周辺に集まり、それ以外は児童の列を囲むようにしていたという証言もあり、指揮台周辺で相談に加わっていた教職員の人数は証言によって異なるものの、教職員Bや教職員Gなど、高学年の担任や比較的長く同校に勤務していた教職員が集まっていたとの証言がある。

指揮台の付近では、教職員がラジオを聞いていたとの証言がある。一方で、少なくとも職員室にあったCDプレーヤー付きラジオは、地震の揺れで落下して使えない状態だったため持ち出されていなかったとされ、ラジオは聞いていなかったとする証言もある。

15時少し前くらいから、地震発生時に校内あるいは学校付近にいた保護者が、引き渡しを求め始めた。教職員Bが引き渡しを記録するよう指示し、教職員Cが校舎内から名簿を取ってきたという証言がある。当初は、教職員Dが記録を担当して引き渡しを始めた。引き渡しはスムーズに行われ、およそ15時10分くらいまでの間に9名の児童の引き渡しが完了した。なお、そのうち少なくとも1名は、親族以外（別の児童の保護者）に引き渡された。なお、引渡しのために長机が準備されていたとの証言もあるが、一方で、そのような机には気づかなかったという証言もある。

迎えに来た保護者は、互いに知っている者同士が、津波警報が出されていることを伝え合ったりしていた。中にはラジオ等で聞いた津波に関する情報をもとに、これを教職員に伝えて避難をうながす保護者もあり、教職員から「お母さん、落ち着いて」と声をかけてもらっ

たとしている。しかし一方で、児童を引き渡された後もしばらく校庭に残って知り合いの保護者などと話をしている保護者や、学校に来たものの子どもの引き渡しを受けずにまた学校を離れた保護者もいた。

この間、教職員 A は、校外にいる教職員 E や市教育委員会へ何度も電話をかけたが、つながらなかったとしている。そこで、数日前に災害時優先電話となる避難所特設電話のコネクタが体育館階段下に設置されたことを思い出し、職員室から接続用の電話機を持ち出して接続を試みた。しかし、コネクタ部に鍵がかかっていたか、あるいは物が倒れたりしていたか、いずれかの理由で接続はできず、電話を利用することはできなかった。

15時10～15分頃、スクールバスの運転士が、同僚運転士と無線で交信している。その交信の中で、スクールバス運転士は「学校の判断が得られない」と述べ、これに対して交信相手の同僚は「自分の判断で避難しろ」と伝えたと証言している。また、これとほぼ同じ頃、長面地区に住む保護者の一人が自宅へ帰る途中で大川小学校の前を通った。この保護者は、停車中のスクールバス近くにいったん停車して、顔見知りだったバスの運転士に「子どもは送ってもらえるのか？」と聞いた。これに対して運転士は、「待機している。(子どもを自分で連れて行くかどうか)自分で判断した方がいい」と答えたとされている。

#### ⑤この間の校庭における教職員・児童の会話内容など

校庭での二次避難を続ける児童の間では、防災行政無線で「大津波警報発令」を聞いたこともあり、避難直後から「津波が来るのかな」「ここは海岸付近かな」「来てもらいたくないだろう」などと津波のことが話題になっていた。中には、2日前に起こった地震を受けて保護者から「大きな地震の際は津波が来るから山へ逃げろ」と教えられていたため、教職員に「山に登るの」と尋ね、「登れないんだよ。危ないからダメなんだ。校庭にいた方が大丈夫だよ。」と言われたとする児童もいる。また事故後、亡くなった子どものようすを複数の児童に尋ね、いずれの児童からも「山への避難を強く教職員に訴えていた」と聞いたご遺族もいる。

避難直後は1学年2列ずつに整列してしゃがんでいた児童たちの列は、引き渡しが進むに連れて人数が減っていったこともあり、時間の経過とともに徐々に崩れた。教職員から「丸くなっていい」と言われて輪になったという証言もあるが、特に指示がないまま自然と輪になって話をするようになったとの証言もある。

2日前の地震で校庭へ避難した際には何も起こらなかったことから、当初はそれほど強い不安は感じていなかったものの、天候が悪化して雪が降り出す中で徐々に不安感が増し、また当初は津波の心配をしていたが徐々に自宅のことを気に懸けるようになったとする証言もあった。また、繰り返す余震のたびに「おお～！」という声が児童の間で広がったりもしていた。しかし一方で、一部の児童が校庭の端にある樹木の付近で遊び始めたとする証言や、子ども同士の会話内容はゲームやマンガ、翌週の時間割のことなど日常的なものだったとす

る証言もある。児童から得られた証言の中には、教職員から何の指示も出されなかったので、待つしかなかった、遊ぶようになった、などと述べるものもあった。

一方、この間も教職員は、校庭に来た地域住民も交えて相談していた。地域住民のひとりには、「津波が来る」などと言いながら、校門から校庭方向へ走る姿を目撃されている。時期は明らかではないが、この相談の中で、山に危険がないかどうかを教職員が地域住民に相談していたという証言がある。また、これもどの時期かは不明であるが、校庭より若干敷地の高い釜谷交流会館の駐車場へ移動してはどうかという提案が地域住民から出されたが、駐車場は校庭よりも狭い上に、余震による建物被害の危険性があるのではないかという判断から、移動はしなかったとする証言もある。

### ⑥ 15時15分頃から三次避難開始まで

地震直後から降り出していた雪の影響もあって、校庭で待つ間に、寒さへの対応を行う必要性が高まった。教職員 A は、低学年棟の1～2年生の教室からジャンパーなどの服を持ち出して児童に渡したり、一部、引き渡す児童の荷物を教室から取り出すのを手伝ったりしていた。他の一部教職員も同じように対応したようで、児童の中には、担任だった他の教職員に上着を持ってきてもらったとする証言もある。

15時20分過ぎ頃、当初から引き渡し対応の中心的役割を担っていた教職員 D が引き渡しを外れ、他の教職員が代わる代わる担当するようになった<sup>3)</sup>。引き渡しを交代した教職員 D は、昇降口付近に置かれていたかまどと薪を運搬用の一輪車に乗せ、校庭へ運んだとされる。ただし、こうした対応について、教職員同士の話し合いが行われていたとする証言はない。

その後、教職員 A は、教職員 B や教職員 G に「山に逃げますか？」と声を掛けたとする。これに対して、山は危ないから行けないといった趣旨の返答はあったが、それ以上の指示や相談はなかった。このため教職員 A は、自分が校内にどこか安全に避難できる場所がないか探すと伝え、再び校舎内へ入った。

15時23分頃、長面地区の住民の避難を念頭に、大川小学校の体育館が受け入れ可能かどうかを、河北総合支所の市職員が確認に来た。対応した教職員は、落下物等が多く危険なため利用できないと伝えた。市職員が校内にいたのはごく短時間（1～2分）で、体育館に関する会話以外には特に会話はしなかった。この市職員の乗る公用車は、県道へ戻る際にスクールバスの運転士に誘導を受けている。

一方、上記の市職員が小学校に来た直後頃、県道上に停車していたスクールバスが、バックで正門から校地内に入ったとみられる。

この頃に児童の引き渡しを受けた保護者は、学校を車で出てから三角地帯から大橋を渡っ

<sup>3)</sup> どの教職員が引き渡しを担当したか確認できる児童13名のうち、15時20分頃までに引き渡された10名の内訳は、教職員 D 7名、教職員 K 2名、教職員 I 1名だった。これ以降は、教職員 D 0名、教職員 K 1名、教職員 G 1名、教職員 L 1名になっている。

た。この保護者は、橋の上から津波の立ち上がりと思われる白波が橋の下あたりに見えたと証言し、また、同乗者は遠く下流に一段と高い波が押し寄せている様子が見えたと述べた。

#### ⑦三次避難から津波来襲まで

その後、15時33～34分頃になって、校庭からの三次避難として、三角地帯への移動が決定された。移動開始に際しては、教職員Bをはじめ教職員が児童らに指示を出したという証言がある。また、地域住民が「三角地帯に移動します」と呼び掛ける声を、学校付近にいた地域住民が聞いている。

移動経路は、自転車置き場の脇から道路Aに出て、釜谷交流会館の駐車場を横切って民家宅地内の通路へ向かい、その先を右に曲がって県道を目指すというものだったとされる。移動開始から列の先頭が交流会館の駐車場入口付近にさしかかる頃までは、校庭にいた地域住民が先頭付近を歩き、そのあとに児童が続いていたため、その移動速度はかなりゆっくりだったとする証言があるが、児童の中には、移動の際に地域住民の姿は見なかったとする者もいる。また高学年児童のひとり、自分が校庭を出る頃から、付近に教職員Iがいたと証言している。

校庭からの移動開始に際して、教職員Jがひとり、移動後に引き取りに来た保護者への対応のために校庭に残ったという証言がある。また、移動を開始した頃、教職員Bは児童たちの進む経路を進まず、道路Aを県道の方に向かった。教職員Bは、その後すぐに戻ってきて、「津波が来ていますので皆さん急いでください」と児童らに声を掛けた。

その頃、教職員Aは、校舎内の2階に避難できる場所の目安を考えて、渡り廊下から体育館に移動し、体育館入口から校庭に出た。その際、児童の移動はすでに始まっており、先頭はすでに釜谷交流会館の駐車場付近、最後尾が校庭のタイヤ遊具のあたりにいた。移動している児童たち以外は、校庭には人影がなかったとしている。教職員Aは、避難する列を小走りで追い、付近にいた人（特定できないが成人）にどこへ向かうのか聞いたところ、三角地帯へ移動することにしたとの回答を得たと証言している。このときの移動速度は、早足程度だったとされる。

津波が来ているから急ぐようにとの教職員Bの声掛けを受け、列は乱れ、小走りで先を目指した児童もいた。校庭から150mほど移動して県道に差し掛かったあたりで、先頭付近にいた一部の児童らは新北上大橋直下付近から津波が越流し、付近の家を破壊した様子を目撃した。この津波を目撃した児童らはあわてて来た道を走って戻り、正面の山を駆け登った。この付近の斜面は急だった上に、雪が積もっていたためにとっても登りづらかったという証言がある。なお、列の先頭にいなかったために津波を目撃していない児童らは、逃げている児童がなぜこのような行動をしているか理解できない様子だったとの証言もある。

一方、教職員Aは、列の最後尾付近にいて、釜谷交流会館の駐車場から出たあたりか、その少し先あたりにいた。家々の隙間から見えた県道上に、長面方向から三角地帯方向へ移動

する高さ数メートルの津波が見えた。少し前まで走って先を進んでいた児童らに大声で「こっちだ、こっちだ！山だ、山だ！」と声を掛け、これに気づいた数人の児童が山へ走り出したのを見て、教職員 A も叫びながら山へ駆け上がった。

この直後、教職員や児童のいた付近一帯を津波が襲った。津波来襲の直前、突風のような風を感じたり、飛行機の音のような大きな音を聞いたとする者が少なくない。

津波来襲